校長室より

令和6年9月6日（金）

「敗者のふるまい」

今年の全国高校野球選手権大会（夏の甲子園）の一番の試合と言っていいのが、大社（島根）と早稲田実業（西東京）の激闘でした。試合は延長１１回タイブレークの末、大社が勝利したのですが、試合終了後、早稲田実業の和泉監督のふるまいに私自身も大きな感動を覚えました。これは、のちのニュース報道でも取り上げられていましたね。

和泉監督は大社高校の校歌を聞いた後、泣き崩れる選手とともに応援団へのあいさつなどを終えると、選手たちをベンチの前にきれいに整列させました。大会では、勝ったチームからグラウンドから出て行くことになっているのですが、そこで和泉監督は自分の前を通っていく大社の選手一人一人に優しい笑みを浮かべて声をかけていたのです。

和泉監督はインタビューの中で「お互いの生徒が美しかった。負けは覚えられてないけど、今日の敗戦は監督を辞めても覚えていると思う。生徒たちは本当によくやった。６０歳すぎてこんなに良い試合経験を経験させてもらえるとは。甲子園のナイターは美しかった」と振り返っています。

負けて悔しいはずの和泉監督が笑顔で声をかける姿に、監督としてではなく、先生であり指導者、そして一人の人間としての尊敬の念を抱いたのは私だけではないでしょう。

勝負の世界は大変厳しく、最後には勝者と敗者が生まれます。そんな中でも、相手チーム（選手）を尊敬し、お互いの健闘をたたえ合うことこそが大切なのではないかと思いました。

余談ですが、先のパリオリンピックでは試合後の選手やコーチの言動に残念な場面がたくさん見られただけに、今回の和泉監督のふるまいはとてもうれしく、誇りに思いました。